

現代社会における人間の問題（上）

安 藤 俊 雄

本稿は昭和四十八年五月三日、名古屋市郊外三好町の真宗大谷派大覚寺における、前大谷大学学長故安藤俊雄先生の講演の筆録である。これは恐らく先生の最後の講演であって、それだけに円熟した佛教思想とユニークな現代思想批判が盛り込まれており、誠に貴重な記録となっているので、ここに掲載することにした。

編集部

今日は題目をいただいておまして、只今御紹介がありましたように、「現代社会における人間の問題」という非常に大きな問題であります。佛教の一隅、ほんの片隅をほじってしらべておりますだけの者でございますから、とうてい御期待にそえるようなお話もできないかと思っておりますが、一つその点は御勘弁をいただきたいと思っております。現代社会といわれましたも、これは我々が実際に生活しておるところでございますから、どういう特徴があるかとか、そんなことをいちいち申し上げなくても、これはおたがいに実感でおわかりのことだと思えます。

私は本年六十五歳であります。したがって明治生れでございます。明治の時代のこと、幼少過ぎまして記憶がございませんが、大正のはじめからのことについては、おぼろげに記憶しておるわけでございます。その少年の頃の学校生活、それから昭和になりましたからのいろんな移り行きだとか、あるいは戦争の間、私は約五ヶ年半の間に、

召集を二回もうけまして、ほとんど戦場の生活を四年間くらいいたしましたして、満州、北支、中支、南支とずっと機關銃隊の一兵卒で参加いたしました。それから昭和二十一年の四月に上海から博多へ復員いたしましたから、敗戦日本の姿を汽車の窓から見せつけられましたして、リュックサックをしょって、故郷に帰りまして、食料難の苦しさ、敗戦の虚脱状態とかいうような事も味わわれました。

それから、皆さんもそうだと思いますが、今度はいつの間にか、この世界有数のお金持ちの国になるまでの変転というようなものを眼のあたりに見せられました。そこで現代とは何かということを考えてみますと、ある面では、こんな幸福な時代はない。特に敗戦直後の頃の食料難の時代を思いますと、私は故郷は愛知県の渥美半島でございますけれども、昔から奥郡といいますが、本当は後れ郡おくというのだそうでありまして、つまり文化が百年おくられているのが渥美半島だといわれておりますが、そういう渥美半島の山と海の草深いところへ、主に関西の都市の市民たちが、さつまいもを買いにリュックサックをしょって歩いてやってくるというようなあの頃とくらべますと、今日の日本は、本当に幸福なよい国になったということを感じ致します。けれどもその反面において、ある意味では今日ほど不幸な時代はない。それは申すまでもなく、物質的には繁栄の極限にまでのぼりつめていて、世界中からうらやまれるくらいに繁栄する日本でありますけれども、何か精神的には、ある意味では非常に不幸な時代、日本の歴史がたち始まってから今日まで、こんな不幸な時代はない。なぜ不幸かといえば、人々は物質的な繁栄に満足できないで、非常な不安の中に陥れられておるし、また、中には生きる意義さえわからないというようなことで、生きていることの意味さえ自覚できないということから、いろいろな、はたからは理解できないような行動をおこす人々が、新聞紙上を賑わしているということは御承知の通りでございます。これはなにも日本の特徴ではなしに、世界全体の文明の特徴であり、現代は人類が一種の精神病の道をたどりつつあるというようなことを精神科の医学者たち、あるいは心理学者たちは、声を大にして叫んでおるのでございます。

精神病院は今、花盛りであるといわれておりますが、精神病といいますが、脳梅毒とか、あるいは大脳の構造に障害がおきておこる、そういう身因性といえますか、身体の欠陥から生ずる精神病というのは、これは昔も今も変わりはありません。けれども、そうではなしに、ノイローゼといえますか、まあこれは心因性、心を原因とするところのノイローゼというものが非常に多いということです。わたしは学校におります関係で、この十年ほど前、学生部長をしてやったことがあります、関西の大学の学生部長会議というものがいつも月曜日に懇談会をもちますので、月曜懇談会といっておりましたが、その集まりでいつも問題になりますのは、原因不明の自殺が流行して、その予防の方法がないということでございます。皆さんはそんなことはあるかと思われませんか、これは非常に多いですから御参考までに聞いていただきたいと思いますが、特に自然科学の系統の学問をする人々の間に多い様であります。たとえば、一例をあげますならば、わたし、実際に行ったことがあるから申しあげるのですけれども、九州戸畑に、九州工業大学という大学がございます。もとは安川電気が経営しておりました九州工業専門学校といいましたが、今では国立になりました、九州では非常にエリートコースの、入学試験も非常にむずかしい大学でございますが、そこで、年々自殺する学生が増えてまいりまして、学校側が調べると、家庭の事情に何か困難なことがあるか。そんなことはない。学資金に困っているか。困らない、裕福である。では恋愛でもしているか。恋愛事件もない。学校の成績は悪いか。いや非常によろしい。で、警察が動き出しまして、各方面を調べるのでありますけれども、何も原因はない。ところが、ある年は五人、ある年は三人、ある年は七人というふうに、自殺する学生がたえまないということですね、学校あげての大問題になりました。それで、同様な傾向が全国にずっと広がりました、さきほど申しました月曜懇談会で、関西の大学の学生部長が集まりました皆報告をしますと、どの大学でも自殺がある。ことに多いのは京都大学で、今は少なくなりましたがこの十年程前ですが、京都大学で非常に多いということで、これは精神科の教授に相談するがよからうということで、それで医学部の精神科の先生に相談しました結果、予防のために口

ールシャツハ・テストというものをやることにしました。これは、スイスの精神科の医学者のロールシャツハという人が発明した精神病のテストの方法でございますが、白い紙でシミが広がるようなやわらかな紙質の紙を選びまして、そこにインクをぶっつけてやる。そうすると、そのインクのシミがいろいろな斑点で、任意ないろんな形にひろがってシミがひとつの図をつくる。それをみせる。これを見て何を連想しますかという質問をして解答を出させる。これが一番初歩にやるテストであります。その他にも赤い色をみせるとか、白い色をみせるとか、黒い色を見せるとか、あるいは静止したものの図面や絵を見せるとか、あるいは馬がおどっているような絵を見せる。そしてそれについての反応を調査しまして、それからそれに基いて、その人の精神状況は安定しているか、不安定であるか、あるいは今にも自殺しそうであるかというようなことまでもわかるのだそうです。

それで、京都大学は三百人くらいの任意の学生に向かって、学生部の部屋に集まってもらってロールシャツハ・テストをやったそうです。そうするとその中で、およそ五十人以上の学生の精神が不安定であるということがわかる。で、さらに段々調べていって、十人くらいはもう放っておけない。赤信号である。もし放っておけば自殺するというくらい精神が動揺している状態の学生をさぐりあてまして、その者に対して学生部長が相談をして調べてみますと、「もう生きる意味がない」「君はもう卒業するじゃないか」「卒業なんかどうでもよい、第一生きるこの意味がなくなってしまうている」「それは惜しいではないか。お父さんやお母さんが故郷の方では、君の卒業を待っているのに、君が生きる意味がないなどといっておったのでは、せっかく今まで激烈な入学試験などを耐えて来た苦労が何にもなくなってしまうのではないか」といいますと、「いや、そんなこと問題じゃないですよ。親が子供に期待してそういうことを勝手にやっているだけで、期待されている私自身が生きる望みがないのだから、生きておる意味はなく、いつ死んだっていいではないですか。」という様なものが五、六人はっきりわかりまして、さあテンヤワンヤの大騒動で、その人達にいろいろ注意をしているというようなことが発表されたことがあります。これは実際にわか

るんだそうでした、まあ例えば絵を書かせてみる。例えば断崖絶壁の崖の上です、一本の松が生えている。「その崖の上に生えている一本の松を絵に画いて下さい」とたのむとですね、精神が安定していて自分の生活に何の動揺もない、そういう精神状況における学生ですと、例えば根とは細くて、上の方はかえって太くなったりするそういうような松を平気で画くわけですね。普通の日本画家が画く松というものは何も根もとだけが太いとはかぎらない。上の方が太くなったりするところもございますね。それをその通りに画くそうですけれども、極端に悪い、精神の安定してない、一日一日を送っていくことに自分の確信も希望ももてないような、そういう精神状態の学生でございますと、この根もとの方を非常に太く画くんだそうですね。大地から空中に向かって生えているその松の木は、断崖絶壁の上ですから、しかも風雪に耐えていくためには、よほど根をしっかりとりにしていないといけないのでですね、根もとを非常に太くする。そこは、つまり一つの絵を画きましても、画く人の心が安定しない、動揺してフラフラしているような状態の者でありますと、そういうような絵をどうしても画くということになります。いまアメリカなんかでは、お医者さんでなくて心理学者が、アメリカの市民の要求に答えて、あなたの精神状態を分析してあげましょう、テストしてあげましょうと、ロトルシャッハ・テストをするだけで、結構商売が成りたつくらいになっているそうです。日本では心理学者はそういう営業をしておりますが、機械文明で世界随一のアメリカ社会にそういう心理、自分の心が安定しているか動揺しているかということ調べてもらわなくてはならないような精神の不安定な市民が、アメリカ社会に沢山いるということを示しておるわけでございます。そしてそういうようなことが現実には日本の大学生の間で、十年程前、非常に憂慮されておったわけでございます。

それがどうですか、今はないのです。今は生きる望みはなくなつて、もう死ぬなんていう学生は余りありません。そのかわりに何が起きたかという、大学紛争が起きたということです。これは、はげ口があったということです。大学紛争というものは、それぞれ大学の改革運動をやるということで、一つの理想像というものをもってですね、そ

れを必ず実現してみせるという希望に燃えて、社会の人から見ますならば、大あばれしたわけでございますが、それが起ると、自殺という現象は間もなく消えてしまいました。そのかわり大学は紛争で混乱して、非常に大さわぎをして、現に今でも、例えば京都大学の文学部長室は封鎖されております。文学部長さんは自分の部屋に入れない。それから京都大学C戦線というものがありまして、これは国際的な政治活動、社会改造の立場ということで、テルアビブ事件にも参加している。そういう国際的な規模の活動です。例えば京都大学の図書館の横の壁には「テルアビブに続け、その犠牲岡本公三に続け」といって堂々と大きな幕をたらしめているのであります。これは学生だけのことであります。しかし、今日の日本の、そして明日の日本を担ういわばリーダーを養成する教育機関においてそういうことが行なわれているということは、やっぱりこれは精神が健全でない。何か非常に異常な状態である。つまり心因性、心を原因とするところの一種の精神病的な症状がなお続いているということが言えると思っております。

それは、おしなべてそういう大学ばかりでなしに、現代の日本社会の中にも眼を向けてみますならば、いろんな現象において、それが見られると思います。例えば先般の国鉄のストのやり方をみても、一瞬にして東京の国電の駅が暴動の巷になってしまつて、それは日常化するようになってしまつたとか、あるいはストが終つたと思えば新幹線の一車両二車両を国鉄の職員が占領して一般市民は乗せないということが公然と行なわれるとか、何かそこに同じ日本人でありながら、もう話し合ひのつかない、人のことを考えることの余裕のない程、狭量といえますか、そこには、ただあの人は広い心を持った人だとか、今の若い人は狭量で根性が小さいとか心が狭いとかいう、その氣質の問題ではなくして、何かこの、追われるもの、一種の精神医学的に見るより他に解きほぐして見ようのない衝動性といえますか、衝動によって動くということになれば、これは動物と同じことであります。そういう衝動的な次元でしか考えられないような人間の行動というものが、あらゆる面に現われているということが言えると思つております。

こんなことを一々私が申すまでもなく皆様がよく御承知だと思つますが、そこです。ね、いったいこれから我々が

どうすればいいか、まあ、御当地のような静かな自然に囲まれて、都会ですさんだ心をなぐさめてくれるようなところへ来て、そういう人間精神の現代におけるいろんな精神病的な現象の話をしていてもよそ事のように思えますけれども、でもやっぱりこの日本の国土でもですね、東京や大阪や名古屋というような大都会だけでなしに、今では山村の静かな環境も次第にこわされて来ています。昔は渥美湾の魚と言えば太平洋の魚よりも味がデリケートであるし、上等の魚というふうに考えておりましたけれども、最近はそうは思いません。渥美湾、内海でとれる魚は却って下等品であって、むしろ太平洋の遠い遠洋航海で持って来てもらう魚の方が安心して食べられるくらいにですね、工場の汚水ばかりでなしに、農村でも養牛、養豚業というようなことが大規模に行なわれるようになりました関係から、その汚水の為に、海水そのものは地元の者ではとても口にできないほど汚染されている。こういうことを考えていきますと、もう都会も農村も同じことであって、程度の差はありましても自然の環境というものは、遠からず安住の地ではなくなるということを考えなければならぬというわけでございます。

アメリカでは、マルクーゼという、これはマルクスの後のマルクス、現代のマルクスといわれる人が、自然というものを改造する資本主義の社会というものが自然を如何に破壊していくかということを非常にくわしく書いた本を出しております。私はマルクーゼという人にはそんなに賛成しておりませんから、半信半疑で批判的に読んで行きますけれども、この人の意見でございますと、人間というものは、ただ人と人が話し合うだけでは幸福になれない。人と人との間では利害関係があるから、あるいは対立し、喧嘩もし、しまいは分裂するということがあり得る。従って家族制度もアメリカ社会では個人単位になってしまつて、家庭はだんらん場所ではない。これは資本主義がそうしたんだというのであります。それでも人間の心は必ずしもまだ不幸ではないけれども、一番不幸なことは自然環境を破壊されてしまったということである。人間同志の社会の中で人間が自分というものがみとめられ、理解され、あるいは尊敬されるということは、人間にとって非常に幸福なことである。人類はだれでもそういうことを願っている

はずだが、ところが人間というものは、お互いに利害関係があつて、お互いに不完全な、佛教でいう凡夫の寄り集まりでありますから、そういう公平に人を尊敬したり、人の値打を認めるといふことは、そううまくはいかない。けれども、たといそこで失敗をしても、人間というものはまだ最後の望みというものがないわけではない。それは何かといふと、自然の環境が正しい自然の姿であるといふことです。例えば都會に出て失敗をし、同僚からバカ者、あいつは敗北者だといふふうに軽蔑されて、かりに農村へ帰っていく。自分の故郷へ、自分の家へ帰っていく。そうすると自分の家あるいは故郷をとりまくところの自然環境が、山は山、野は野、畑は畑としての自然環境があるべき姿においてあれば、傷ついた魂は、自然に、これは声なき声で慰めてもらえる。山をつたわつて来る風の音に、傷ついた心をやわらげてもらい、野に咲く花に生きる喜びを教えられる。利害関係、対立関係の中にしか生きて行けない人間、その人間は、人と人との間という関係的存在ですね。人間というものは本当は人と言わなければなりません、私共は普通、人ということもありますけれども、人間といえますね。人でなくて人間であるといふことは関係的存在といふことは複数の共同社会的存在といふことですね。その社会的存在といふことで失敗をしても、自然の世界において、青い空に心を明るくされ、東から昇る太陽に心を暖められ、また風の音を聞いて怒りをわすれ、悲しみを溶すことができるのに、その自然を破壊するのは資本主義だといふのですね。まあ、資本主義というものは利潤追求のことばかり第一にするから容赦はない。どんな美しい自然の世界であろうと、どんなブルドゥーザーで破壊していつて、傷つけ、たたきつけ、自然を無残な姿に打ちこわしてしまふ。といふことによつて、人間というものは人間であることに失敗して、人としての孤独の心をなぐさめてくれる最後のよりどころである自然環境さえも破壊されてしまえば、この人はもはや生きることができないのである。中途まで読んだだけでありますから、マルクレーの言おうとするところは、まだこんなことぐらいじゃないと思ひますが、一体、共産主義社会においてどういふふうなことをやるのかといふことまでは、まだ読んでおりませんから、はっきり申せませんが、今まで読んだだけでの範囲ならですね、私

は一理あると思いましたよ。今、アメリカ社会、あるいはイスラエルのテルアビブ事件などを指導しているイデオロギーというのはマルクレーゼですね。今マルクレーゼがぶれが多いわけです。ですから、そういうラディカルな、極端な過激思想というものは、余程警戒して読まなくてはなりません。今読んだ範囲の中ではですね、私は佛教の立場からみて、なるほどなと思う点があることは事実ですね。

例えば一例をあげますと、華嚴経というお経がございますね。これは有名なお経で大方広佛華嚴経というお経であります。お釈迦さんが二千五百年昔にブッダガヤの森で悟りをお開きになった。そして、三七日の間その悟られた教えを反芻してしみじみと悦んでおられた。その二十一日が終りまして、皆の勧めに従ってお釈迦様がお悟りの内容をご説法なさるといのが大方広佛華嚴経というお経でございますね。で、その華嚴経は老大なものでございますが、お釈迦さんが悟りをお開きになったのは、つまらない尼連禪河という川のウルベラーという森の中で、菩提樹の木が繁っていたというくらいですから、まあ、インドとしては何の変哲もないそういう森の中でお釈迦さんは十二月八日暁の明星がキラッと輝くのをごらんになって、インスピレーションで悟りをお開きになった。そのインスピレーションといたって、簡単に私共がああいいことを思いついたなどということではなしに、これはお釈迦様がすみずみまで自分と社会と、あるいは世界ということ思索して、如何にして人間が生くべきか、世界は如何にあるべきかという問題について、すみからすみまでその思索をめぐらして、それを根本的に解決するという原理をここでお悟りになったということですね。いわば棘や茨が生い繁って、瓦やつぶてがあるという、日本にもある、インドにもある、世界中どこにもある、三好町にもある、渥美半島にもあるような、なんでもない森の中でお悟りをお開きになった。いわば佛教でいう汚れた世界ですね。そういう汚れた世界の中でお悟りをお開きになったということです。すると、いろいろと説があります。一般的な伝説にしたがって、十二月八日、人生と世界は如何にあるべきかということを考えておいてになったお釈迦様の深刻な思索の苦しみの中にパッと暁の明星をごらんになった時に、閃めいた悟り、ふ

と眼を上げられた時に、お釈迦様はびっくりなさる。今までブツダガヤの森であると思っていたその森が、いつのまにか蓮華藏世界というお浄土にかわったということですね。蓮華藏世界といいますと、これは大方広佛華嚴經というお経が説く一つの世界、理想社会といいますが、あるいはお浄土といいますが、蓮の華につつまれた世界というのが、大方広佛華嚴經というお経が描くところの理想社会、理想世界の名前でございます。で、その中で先程のマルクーゼの話とむすびつく点は、どうかといえますと、今まできたないきたない世界だと思っていたその現実世界が、もう眼をみはるような美しい、光輝く世界にかわって、森の中の菩提樹の一つ一つはつまらない森の木だと思っていたその木がですね、いわば草木がただの草木ではなくて皆佛々相念の姿、松は松の木、まあ松の木がインドにあったかは何りませんが、杉の木あるいは椎の木、いろんな木がある、その木がただの自然の世界であると思っていたら、そうじゃなしに、お釈迦様がよくその木を見みると、その木の中に蓮華藏世界の大千世界、つまりお釈迦様の宇宙ですね、お釈迦様をつつむインド、あるいは世界全体をつつむ大宇宙が、今見ている一本の木の中に小宇宙として、ちゃんと同じ構造でその中にもあって、そこに一人の佛がましまして、その佛が両手をあわせて、その木を見ている自分に向って合掌しておる、そういうことを佛々相念といえます。佛と佛が相念佛し合うということをごらんになってお釈迦様はびっくりなさったということです。

元ハイデルベルク大学の学長をしておりますカール・ヤスパースという有名な学者がおります。今は哲学者ですが、この人は元は精神医学の権威者です。日本の精神医学の先生でそのヤスパースの『精神医学総論』という本を読まない人はございません。岩波書店から出ました上中下三巻の膨大な書物でございますが、そのヤスパースの『精神医学総論』の中で、今の華嚴經の佛々相念の境地は、これは幻覚を治療する教えであるといっていますね。精神医学の方からいえば、何か一つの幻覚、そんなことは実際にありもしないのにそういうことがあったように想う患者がおりますね。精神科の患者の中には、そういう幻覚とか、幻聴ですね、実際にそんな音は聞こえないのに、あゝ電車の

音が聞こえるとか、あゝ今、お父さんがやってきたとか、そういう幻聴を聞いたり、あるいは神の声を聞いたりするという幻聴がごいますね。そういう幻覚や幻聴の例などを出してですね、そしてそういう精神病の疾患をもつ人達を救う道は、どうすればいいか、いろんなショック療法をするとか、あるいは眠らせるとか、あるいは転地療法させるとか、あるいは安定剤をのますとか、色んな療法があることを説きまして、そして最後には、この精神医学というものには限界がある、これを本当に治すものは何かということを説く中で、佛教の教えを出しますね。人間の社会というものは互いに憎しみや対立の世界である。この世界の中に苦しむ人がそれを戦い抜ける。その苦しみに負けてしまうと、倒れてしまいか気狂いになるかである。世界は残酷な人間同志のより集まりで苦しみの世界だけれども、佛が神様が自分を迎えてきてくれたとか、あるいは天使が自分を迎えてきてくれたとかいう幻覚や幻聴の中に生きるより他に生きる道のない人がだんだん増えてくる。けれども、それは本当に強い者じゃない。本当に強いのは、例えば、佛陀が菩提樹の森の中で前の晩から前夜中夜後夜にわたって十二因縁という道理を観察なさって、どうして生老病死の苦しみがあるか、四苦八苦といわれる苦しみがなぜ人間にあるのか、ということをよく考えてみられた。だんだんとその原因を追求して行って、結局は人間自身の心の潜在意識の中に働いている無明煩惱というものが世界を暗くし自分を暗くし、結局は、自分自身が縄で首をしめるより他に道のないことになったのは、社会が悪いのじゃない、自分が悪いのであるということ、前夜中夜後夜に仮借のない強靱な思索をめぐらして深く深く掘りさげていった時に、つまり悟りをお開きになった。その悟りを開いた眼で、今まではこのブツダガヤの森の雑木林のつまらない茨や棘が生い繁って何の変哲もない、そういうつまらん自然の環境だなあと注意もしないくらいな自然環境がですね、空を見れば雲がたなびいて、東雲しののめの空には、闇ではあるけれども地平線のかなたから浮かんでくる太陽の光をうけて、真夜中には何も見えなかったその中天には、雲が黄金色に輝き始める。その雲もじっとみて見ると、そこにはやはり蓮華蔵世界の小世界があつて、そこにも一人の佛がおいでになつて説法しておいでになる。小川のせせらぎの流れて

いく音を聞いて、小川を見ればその小川も蓮華蔵世界の小千世界で、そこにも同じような完結した完全なる世界があつて、佛さまの分身がちゃんとおいでになる。どこもかしこもみんな完全な自然の環境であるということですね。そのブツダガヤの森がそのまま蓮華蔵世界になるという光景をお釈迦様がお説きになるといふことが、華嚴經の序品、序曲にあたる場所に非常に美しく描かれておるわけでございます。

私はいま京都からくる列車の中で、そのマルクーゼの本を読みながらですね、華嚴經の序文にあたる所を思い出しました。が、弥勒菩薩を始めとして、文殊師利、あるいは幾多のお弟子達が、そういう美しい蓮華蔵世界というものを、お釈迦様がお説きになることについてですね、みんな讃歌をささげてそれをお釈迦様にプレゼントしますね。そういう美しい情景を想い浮かべるのですが、この荒々しい現代は、今アメリカ社会も非常に荒れ狂っておりますね、あるいは、ドイツの中にマルクーゼの思想に共鳴して、その一部の者が、テルアビブ空港や、アラブのイスラエルとの対立に色々な謀略をしておるといふような、あるいは、日本社会における労使の紛争とかですね、そんなことは世界中おなじ状況にある。だからやっぱりこれは、お釈迦様の場合と同じように、日本を含めて世界全体を含んでいる。世界とは、世というのは過去・現在・未来という時間的な制限のある事ですね。界ということとは、これは何々社会と、いうように空間的に制限があるということ、時間的にも空間的にも区別された社会の中に生きていく人間の運命というものは、日本もアメリカも、あるいはドイツやイギリスもみんな同じであるし、人類が住んでいるのは地球だけで、他の天体には住んでいないかもしれないですが、仮にもっとも遠くへ行けばあるかもしれない。そういうような大規模のですね、絶対的宇宙といいますが、全体宇宙といいますが、それを華嚴經では大千世界といっています。そういう大千世界は何も所かわれば品かわるじゃない。所かわっても品はかわらるのでありますね、ということは、人間の心はかわらんといいことです。

お釈迦様はカピラ城を出て、あアいやなとこだな、こんな小さな釈迦族の王国の中に生きて、大きな国の間にはさ

まっぴら目にあつて難儀しなければならん、いやだなあと思つて国をおでましになつて、そしてあちらこちらの仙人、いわば人生のコンサルタントを訪ねられました後、アーラーラ・カーラーマとかウッド・カラーマ・プッタとかいう仙人を訪ねられました。しかし、こんなのはだめだということで、今度は六年の間修行をなさつて禁欲の生活に入られたのです。飲まず食わず眠らずということで自分の肉体をおとろえさせて、なまじつかこんな身体があるから苦労するのであつて、むしろ身体は弱い方がいい、あんまり丈夫だと煩惱、欲望が多くなるから、身体も適当に弱い方がいいということで禁欲の生活を六年もなさつた。けれどもこれももおかしい、なんでおれはこんな風に生まれていなければならぬか、なんで人間というものは、あるものは病の床に伏し、ある者は丈夫すぎて困らなければならぬか、というようなことを考えめぐらされて、まだおれにはわからんということで先ほどのブッダガヤの森にお入りになり、お考えをめぐらしておいでになつてやがて得道なさつた。得道ということは佛道を獲得なさつたということで、悟りをお開きになつたということでありませう。そうすると、時間の区別があり空間の区別もありまして、世界というものは結局は私であるということである。私共、一人一人が精神の安定を得ますとすね、これは極端にはなりませんが、お釈迦さんのように、いやだいやだと思つておりますこの苦しみの世界、弱肉強食の世界、ただ儲けんかなというこういう世界における限りは、そこには幸福というものはないのであつて、どんな貧窮の中であらうと、どんな苦しい封建社会でありまして私共の先祖はもつと明るい生活をしていた。真宗の妙好人なんてものも決して特殊な人ではないと思ひます。そんな特殊な天才が妙好人になるのなら私共は何も学ばんでもよいのであります、そんな宗教的な天才に恵まれない、普通の社会生活をし、普通の人生の階段を登つていく私共のすべての者が、すべての人間としての苦しみ、悲しみ、悩みというものを悩んでいく中です、一歩も足を踏みはずさず大地にしっかりと足を踏むとおろすというものは、苦しみ、悲しみ、喜びの中にあつて、それを少しも回避しないということすね。いやだから逃げていくのではなしに、苦しければ苦しいほど、悲しければ悲しいほど、その苦しみ悲しみの中にしっかりと足を

すえて、しかも人生の生きる意義というものを充分、明確に維持できるような、そういう生活の原則、原理というものがいま、最も大事な時である。二千五百年昔のお釈迦様、今のマルクーゼをお釈迦様に当てるなんてもってのほかでございますが、しかし、自然環境が私共をなぐさめてくれるというものでありさえすれば、「国破れて山河あり」です。

私、昭和二十一年の三月に捕虜収容所を出て、揚子江をムシヤクという所から下りまして、上海からアメリカの軍艦に乗せられ博多へまいりました。リュックサックを背負い、満員の復員列車の中でなつかしい故郷の山を見れる。それだけでも帰ってきた喜びでいっぱいですね。遠く船の上から岸辺を見れば、揚子江から黄河の河口ですね、黄河の河口あたりから出てくる水でシナの海は黄色の海の色でしたね、それがだんだんと北へのぼって九州に近づけば白砂青松の本当に青々とした海水にかかります。あゝ、日本にきたなあ、うれしいな、だんだん船は博多港へ入って行く、昔かっていたことのある博多の港の面影はなくて一望みんな焼け野原だった。何ということだと思いました。

それから、また汽車に乗せられてずっと下関からくる山陽道の懐しい街々もみんな昔の面影はない。宇品で上船しましたから広島駅なんかは特に懐しかった。原爆がおちて一望一軒の家も見えない。何か白昼夢を見ているのではなからうか、そういうことでございました。豊橋の駅におりると、豊橋の駅もすっかり焼けてしまってもう何も残っておりません。でも心はうれしかったです。まだ自分には故郷がある。それからバスに乗って、恥かしいですが人には見られないようにそっと自分の村でバスをおりました。リュックサックを背負うて、なるべくみんなに会わないように、駆け込むようにまわり道をして自分の寺へ入りました。それくらいなさけない情況で帰りましたけれども、でもですね、ありがたいことには自分の故郷の山々はそのままでございました。それから一年たち二年たち、何の希望もない、ただ帰ったというだけです。何の希望もありませんが、「国破れて山河あり。」日本の国は敗れた、負けた。そんなことを今の若い人に言うと、そんな事、破れてよかったんだと言われますけれども、旧軍人として本当になさ

けない。だからはずかしかった。けれどもですね、そういう中で、他の町は焼けた、だからその他の町で生まれた人はどんなに悲しいだろう。広島に復員列車がついた時に、「みなさん、さようなら、ここが私の故郷です。またあとで会いましょう」と言って、列車指令官に力んであいさつをしていった戦友がすぐに帰ってきました。「もうあんたの家は焼けてしまっただめだ。だからどこか親類の家があったら行きなさいといわれたから戻ってきました」と言って泣きそうな顔をしてですね、大阪の親類の家までまた汽車に乗った者もおります。それにひきかえて私はですよ、後れ郡の、文化百年おくられている我が故郷であります。何の公害もない、昔見た山。昭和十六年に関東軍特別大演習の名のもとで応召をする時に、村の人はもうすでに送っては行かんといわれた。私は一人でバスに乗って豊橋へ行った。その時に見た、あの時におれはこのたんぼを見ても稲がだいぶ育っている。この稲をもう二度と見ないだろう。これが今生の見おさめだ。そう思って別れた稲がまたここにあるわいなと思うだけです、本当にうれしかったですよ。

だから「国破れて山河あり」ということは本当にうれしいことです。国が破れたことは悲しいけれども山河ありということとはうれしい。ところが現代はその山河がだんだんこわされていくことはですね、それは私共にとりまして最後の依り所がなくなるといことです。それでマルクーゼは言っています。自然は自然のままであってほしい。都会の生活というものは苦しい。生活も苦しいが頭も苦しい。人間というものは、今、オートメーションでどの工場へ行って働いても、みんな人間が作りだしな機械だけれども、その機械というものの構造を知るためにはよっぽど頭がよくなくては機械の運転はできやしない。だから工場生活をしておるといことは、もうこれは、本当に自分の劣等感をいやというほど味わわされて、おまえは馬鹿だ、と機械に言われているようなものだ。オートメーションの時代でありますから、人間というものは、都会ばかりじゃない、農村でももう機械に圧倒されて精神がだんだん傷つけられ、いためつけられ、萎縮させられて、心の自由というものはだんだん失なわれていく時代、そういう時に、せ

めて自分の故郷の自然が、あの松の木は昔のまま、この石は昔のままという、その自然にかえれば、その自然がちゃんと語ってくれる。「気の毒だなあ、都会で苦しんで傷ついて気の毒だなあ、しかしワシは昔も今もかわりはない」とその声なき声で語りかけてくる自然の姿に心のいたみをやされていく、ということがあるから、それを傷つけるということはもっての外だというのが、今の理論でございます。が、お釈迦様はそれを二千五百年も昔にそう言っておられる。その自然をですね、こんなものは壊してもいいと無造作に思う。金さえ儲かればどんどん壊してしまえといますと、それは一つの資本主義精神といえますか、そういうものからいえるのであって、もし佛道の上から佛々相念、一木一草の中にも佛様がおいでになって、その佛が私にちゃんとよびかけて合掌して下さる。「お前は気の毒だなあ、おれと相談しようか」というんじゃない。「お前は劣等感にうちひしがれて、機械をつくった人はえらい人だが、お前は劣等のアホだなあ」といわれるんじゃない。そうじゃない。「ちゃんとお前には佛性がある。一切衆生悉有佛性で、私と同じように皆が佛様だぞ」と、私を拜んで下さる。そういうふうに見ると、二千五百年の昔にお釈迦様が説いて下さった。列車の中でこれを思い出しまして、二千五百年も昔といえば随分と昔でございますけれども、やっぱり昔も今も変わりがない。ことに現代において、私共が学ぶ大切なことはそういうことではないかと感じたわけでございます。時間がだいぶ経過しましたので午前の部はこれにておわらせていただきます。

(未完)